

⑮ 監視したい外来植物

種子植物は、若い植物体が種子という形で休眠し、散布されます。種子から発芽した個体は、生長して開花し、自家不和合性でなければ1株だけで繁殖し、子孫を残すことができます。そのようなわけで、種子植物は外来種(帰化植物)が非常に多い生物群です。2021年に愛知県の外来生物リストを更新したときには、種子植物以外の生物(シダ植物やコケ植物を含む)の外来種が326種類であったのに対し、種子植物の外来種は1069種類に達しました。

しかも、この数字は2021年に知られていたものだけです。種子植物の場合、毎年何種かは、愛知県新産のものが発見されます。中には日本全体としても初めてで、「さあ、これは何だ、どこから来たのだ?」と頭をひねることもあります。外来種になるような植物は本来の生育地ではたいてい普通種なので、その土地の図鑑などを調べれば、通常は比較的簡単に正体が判明します。しかし、旅券を持っているわけではないのでどこから来たかわからない。だからどこの図鑑を見たらよいかわからない。ここが一番困るところです。出身地によってはその土地の植物が十分研究されておらず、そこで行き詰まってしまうこともあります。

ただ、新しく日本に侵入した帰化植物のうちかなりのものは、定着できず、やがて消えてしまいます。定着しても、その多くは撈乱地の外に出ることができません。セイタカアワダチソウやオオキンケイギクなどのように、広い範囲に分布を拡大し、在来種に悪影響を与えるようになるものはそれほど多くありません。

しかし、セイタカアワダチソウやオオキンケイギクのようになってしまうたら、根絶はもはや不可能、現在以上拡大しないよう押さえ込むだけでも膨大な手間がかかります。セイタカアワダチソウの場合はアワダチソウグンバイという外来の昆虫が入ってきてかなり減少し、在来植物に対する直接的な影響も少なくなったのですが、これはいわば生態系がまるごと外来になってしまったようなものですから、やはり困ったことです。ヒガタアシ(130頁)のところでも書いているように、外来種はなるべく早い段階で発見し、必要ならまだ有名になる前にたたく。これが重要です。

移入種はどこに侵入するかわからないため、少数の専門家の目ではとても現況を把握しきれません。そこで今回は、6種の指名手配書を作成しました。これらの種は、現在のところまだ個体数が少ないか分布が特定の場所に限られています。今後増加する可能性があり、増加した場合には様々な悪影響が想定される種です。写真があれば正誤は確認できますから、多少は誤報があってもかまいません。「これは怪しい!」というものを見かけたら、是非とも県へご通報ください。



花穂の軸
は長い

(岡崎市, 2017-11-7, 加藤範夫)

外

ヨシススキ

単子葉類 イネ科

Erianthus arundinaceus (Retz.) Jeswiet.

のりめんりよっか まぎ こ やっかいもの
法面緑化に紛れ込んだ厄介者

【形態】

多年生の豪壮なイネ科植物。密に束生する稈は直径 2~3cm、高さは 2m50cm を超える。葉は線形。幅 3~4cm。稈の下部から出て長さ 1m、その基部は葉鞘となって稈を抱く。葉舌は白毛になる。稈の先にサトウキビに似た 40cm を越える長い総状花序をつける。最近建設された自動車専用道の法面やため池法面等に群落を形成する。

【分布と生態】

三遠南信道、第二東名道、国道 23 号線バイパス沿いなどには多量に生育しているが、一部を除き標本資料を採取することができない。東海環状道松平 IC 付近にも生育しており、豊田市下山田代町、瀬戸市、東浦町などでも散発的に確認されている。

【さがすポイントと対策】

高速道路沿い是一般人には手が出せないが、他の場所に出現した場合は、早めの駆除が望ましい。

大型の多年生草本。最近侵入してきた帰化植物の中では最も自然への影響が危惧されるものの一つです。自動車専用道の法面緑化材に紛れ込んできたらしく、三遠南信道、第二東名道沿いには多量に生育しています。秋に通ると白い穂が目立って割合きれいなのですが、とにかく大型で稈と葉が密生して立ち上がるので、周辺の他の植物の生育は著しく阻害されます。よく育てしまったら、簡単に抜くこともできません。周囲の林縁・草地へと広がっていく危険がありますし、種子は風散布されますから、思わぬところに出現する可能性もあります。



葉身はさじ型

調査
テ
ー
マ

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩
- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭
- ⑮

特外

ナガエモウセンゴケ 真正双子葉類 モウセンゴケ科

(尾張旭市, 2016-9-23, 星野智司)

Drosera intermedia Hayne

りょうしきな あいこうか ひがいしゃ
良識無き愛好家の被害者

【形態】

多年生草本。葉には 3cm 程のはっきりした葉柄があり、葉身は長さ 10mm 幅 5mm 程のさじ型(在来モウセンゴケはしゃもじ型)。葉身には粘液を出す腺毛が多数つく。春から夏にかけて、高さ 5cm 程の花茎を立て径 4mm の白い 5 弁花を穂状に着ける。数多くの種子ができ、環境の良い湿地に侵入すると在来のモウセンゴケ類よりも旺盛に繁殖する。

【分布と生態】

標本記録は尾張旭市と東海市にある。この他にも持ち込まれている湿地がありそうだが十分調査は進んでいない。雑種個体の生育も疑われている。

【さがすポイントと対策】

良好な湧水湿地。さじ型の葉で、葉柄の長いモウセンゴケを見つけたら要注意。できる限り駆除する。また、継続的に観察が必要である。

比較的栽培の容易なモウセンゴケの仲間で、原産地は北米～ヨーロッパの北半球の温帯域とされます。中南米でも生育が確認されているようです。国内でも植物園や食虫植物愛好家の手によって広く栽培されている種類ですが、一部の良識無き愛好家達が環境の良い湧水湿地などに播種してしまいました。在来のモウセンゴケ類よりも種子を多くつくり、さらには在来種と交雑もすることから、特定外来生物の指定を受けることになりました。種子は埋土種子として休眠するものもあり、一度侵入すると何年も継続して対策を打つ必要があります。

調査
し
や
す
い
月

- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 1
- 2

調査
テ
ー
マ

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩
- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭
- ⑮

調査
し
や
す
い
月

- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 1
- 2



花は青紫色

葉のへりの
鋸歯は目立たない

(名古屋市, 2016-5-14, 加藤範夫)

【形態】
 茎は直立または斜上し、高さ1mに達する。葉は対生し、無柄で茎を抱き長楕円形、長さ4~8cm、幅1~2cm。花期は4~7月、茎の上部の葉腋から長さ8~15cmの総状花序を出し、多数の花をつける。在来のカワチシャに比べ全体に大きく、花はオオイヌノフグリに似て大きく青紫色である。葉縁の鋸歯は小さくてほとんど全縁に見え、この点で花がない時期でも識別できる。

【分布と生態】
 豊川、木曾川、庄内川の河川敷で確認されている。豊根村富山地区(佐久間湖)からも記録されている。

【さがすポイントと対策】
 現在のところ庄内川中流域以外はあまり多くないが、今後、他の大きな河川沿いに広がる可能性が高い。

【参考資料】
 県 BDBp.163

特外 オオカワチシャ 真正双子葉類 オオバコ科
Veronica anagallis-aquatica L.

しっち きしょうしゅ くちく
湿地の希少種を駆逐

水辺に生育する冬型1年生草本です。在来種のカワチシャ(国の準絶滅危惧、82頁)に似ており、同じような場所に生育しますが、より大形で繁殖力も旺盛です。比較的自然的度の高い低湿地的環境に侵入することから、生物多様性への影響が懸念されます。国の特定外来生物に指定されています。

本種がカワチシャの群落に侵入すると、訪花昆虫がみな花の大きい本種に来てしまうようで、これがカワチシャ衰退の原因ではないかと思って調べているところです。稀にカワチシャと交雑しますが、交雑の頻度は低く、今のところ遺伝的な攪乱はあまり深刻ではなさそうです。



花は青紫色
で目立つ

調査
テ
ー
マ

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩
- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭
- ⑮

(豊川市, 2018-9-16, 加藤範夫)

外 ヤナギバルイラソウ 真正双子葉類 キツネノマゴ科
Ruellia brittoniana Leonard ex Fernald

きれいだが、^{みすべ}水辺に^{しんにゅう}侵入すると^{だいはんも}大繁茂

調査
し
や
す
い
月

- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 1
- 2

【形態】

多年生草本で、茎は高さ 40cm~200cm、直立し多くの枝を分ける。葉は対生し長さ 10cm ほどで線形。全草無毛。葉腋に直径 4cm ほどの紫色の 5 裂する花をつける。花には明らかな花柄がある。果実は細長く、熟すと褐色になりはじけて種子を散らす。種子は水散布され、吸水してゼリー状のものに包まれ、地面などに付着して発芽する。

【分布と生態】

県内では東三河の平野部に多く見られるが、尾張部でも最近確認されるようになった。

【さがすポイントと対策】

道路脇の側溝のます、栽培している花壇からの逸出も多い。排水溝が河川につながっている場合、生育を確認したら河川敷も調べる必要がある。

メキシコ原産。園芸植物として導入されました。大きな紫色の花を長い期間咲かせるので、近年よく植栽されています。栄養繁殖と種子繁殖をし、種子は水に流れて運ばれます。水を吸った種子はゼリー状のものを出し、地面に活着して発芽します。逸出しているものの多くが、排水溝のますの中に生育しているのはそのためです。河川敷などに入ると、在来種を含む他の植物を著しく圧迫します。沖縄などでは、かなり深刻な状態になっています。きれいな花なので栽培したい気持ちはわかりますが、その場合は野生に拡がらないように、管理に特に注意してください。



全体（春日井市，2012-6-2，加藤範夫）
花（名古屋市，2016-5-14，加藤範夫）

外

メリケントキンソウ

真正双子葉類 キク科

Soliva sessilis Ruiz et Pav.

こうえん しばふ まぎ こ やっかいもの
公園の芝生に紛れ込んだ厄介者

【形態】

一年生の草本。草丈は低く数cm程度。地面を這うように細かな枝を広げ、パッチ状の株になり、よく発達したものでは直径20cmを越える。葉は長さ1~3cm。細かく切れ込み裂片の幅は1~2mm。初夏に葉腋に上向きのあまり目立たない頭花をつける。頭花は直径5~8mm。果実は硬く褐色に熟し、上向きの鋭い棘ができる。

【分布と生態】

最初は尾張西部の河川敷や公園に侵入したものと推察される。現在では、東三河にも広がってきている。

【さがすポイントと対策】

公園の芝生やその周りの裸地。湿った土壌のあるところを好む。1年生草本で、晩夏には枯死する。種子は10月頃から発芽し、幼植物のまま冬を越す。

【参考資料】

泉 BDBp.184

最近侵入してきた帰化植物の中で、人体への直接的影響がもっとも危惧される植物です。一見すると柔らかそうな淡い緑色をした草本ですが、初夏~夏に鋭い棘のある果実を作り、その棘が靴の裏側や車のタイヤなどに刺さって運ばれます。公園や河川敷の芝地に入り込み繁茂しますが、小型の植物なので、植物体自体は目立ちません。しかし、うっかり芝生に座ると、飛び上がるほど痛い。座れない芝生では、その価値は激減してしまいます。

駆除活動も行われていますが、一度増加してしまうと、なかなか根絶できません。早期発見が重要です。



葉は円形で
中央に柄がつく

外 ウチワゼニクサ 真正双子葉類 ウコギ科
Hydrocotyle verticillata Thunb. var. *triradiata* (A.Rich.) Fern.

(豊橋市, 2016-10-13, 星野智司)

すいそう に た たいへん
水槽から逃げ出すと大変

【形態】

地下茎は地中を長くはい、各節から多数の根と1枚の葉を出す。葉は長さ10~30cmの柄があり、葉身は楕形について円形で無毛、辺縁には浅い欠刻があるが、ほとんど全縁に見えることもある。花期は5~11月、花茎は葉腋から出て長さ10~20cm、花はその上部に数段輪生する。

【分布と生態】

尾張と東三河、岡崎で報告され、特に東三河南部に多い。豊橋市柳生川では、切れた地下茎が下流に流れ着き増殖している。販売サイトではピオトーブへの導入も勧めているが、野外への植栽は厳に慎むべき。

【さがすポイントと対策】

ため池や河川の水辺。陸上にも生育できるので、干上がった水辺などでは周辺の陸地も調べると良い。

【参考資料】

県 BDBp.188

長い地下茎をひく多年生草本。ウォーターマッシュルームの名前で、アクアリウムプランツとして販売流通しています。ため池や河川の岸などの水辺に密集した群落を形成し、在来の水辺植物に影響を与えます。止水域でも流水域でも生育でき、流れのある水辺では地下茎を水流にたなびかせるようにして広がります。

近縁種のブラジルチドメグサが国の特定外来生物に指定されていますが、全国に急速に広がりつつあるのはウチワゼニクサの方で、実際にはこちらの方が問題が深刻です。タテバチドメグサと呼ばれることもあります。

ヒガタアシ

何らかの人為によって外国から入ってきた生物の中には、相当の厄介者があります。ヒアリやセアカゴケグモのような毒を持つ生物は直接の健康被害が出る可能性があるから問題がわかりやすいのですが、実はもっと困るのは、それが入ることによって、日本の本来の生態系が根底から変わってしまう生物です。その点でヒガタアシは、今まで日本に入ってきた外来生物の中で最悪のものといってもよいでしょう。

ヒガタアシは、高さ 2.5m、茎の基部は直径 3cm に達する大形のイネ科植物です。生長も極めて早く、一度定着すると群落は毎年半径 1m 位ずつ大きくなります。原産地は北アメリカ東部で、耐塩性が極めて高く、1日の半分以上塩水につかるような場所でも生育できます。日本にはもともとこのような場所に生育できる維管束植物はなく、そのため干潮時にはほとんど無植被の広い干潟が出現して、渡り鳥のよい中継地になっています。そこに本種が侵入すれば、干潟は緑の草原に化してしまう可能性があります。実際カリフォルニア湾では、そのようになった事例が報告されています。ヒガタアシは 2008 年に初めて採集されました（実際にはその 2~3 年前に侵入していたらしい）が、種名を確定させるのにしばらく時間がかかり、2011 年に正体が判明したときには既に数力所に拡散し、群落面積の合計は 1ha を越えていました。これは大変だということで、環境省、愛知県、豊橋市で協議会を立ち上げ、根絶を図ることになりました。

漁業関係者の反対があったために農薬が使えず、直接抜き取るしかありませんでしたが、生育地が塩湿地だけにヒガタアシの周辺にはかなりの絶滅危惧生物が生育・生息しています。しかし、時間も資金も限られている中で、そのようなものに気を遣っていたら作業の効率が上がりません。他の生物が巻き添えになっても、ヒガタアシを押さえ込む方を優先すべきです。そのような判断の下に、最大の群落があった梅田川は河道を浚渫して全個体を除去し、最初の侵入地らしかった支流の山崎川は河川改修を行って生育できそうな環境そのものをなくし、その他の場所も人力で、あるいは遮光シートを使って除去し、2017 年に最後に残った 2 株を掘り上げて、ようやくほぼ根絶という状態にこぎつけることができました。もちろん今後も再侵入の可能性があるので、監視は続ける必要があります。

今回の経験からわかることは、外来種対策はとにかく早期に発見し、無名のうちに対策をとるのが重要ということです。有名になり、多くの人の目に触れるようになった時にはもう手遅れです。生物多様性関係者は日頃から地域の自然をよく観察し、何か変わったものがあたら直ぐ報告できるだけの實力を持つことが必要です。また、根絶のためにはある程度の巻き添えはやむを得ません。生物多様性関係者は自分の専門分野だけでなく、地域の生物多様性全般に目を向ける必要があります。



(碧南市, 2018-11-3, 野田賢司)

ヒガタアシ

ヒガタアシについては、豊橋市の事例の他にも、2011年に半田市で確認され、その後の駆除活動により根絶されています。

また、2018年11月には碧南市でも広範囲での生育が確認されました。こちらについても駆除活動が実施され、その後、再生状況の監視を行っています。(2023年11月現在)